

## 探究を楽しみ、学びを自己の生き方に生かそうとする子どもの育成

小学校 吉岡 舞  
研究協力者 山内 孔（愛媛大学）

### 1 主題設定の理由

子どもたちが、将来、地球に生きる一員として多くの人々と共に国際社会を築いていくためには、互いを分かり合い共感する姿勢が不可欠である。共感することで社会の問題を身近な課題として捉え、他者と協働して解決しようとすることができる。

一年次研究では、世界が抱える問題に目を向け、共同学習者や学習の対象に共感し、興味を持ったことを探究したり、問題解決の方法を考えて実践したりした。それらの学習を通して、自分は世界とつながっていることに気付き、地球に生きる一員であることを自覚することができた。また、もの・こと、人とかかわり、協働的に課題を解決したり成功体験を積み重ねたりすることで、〈自己効力感〉が高まっている姿が見られた。

くすのき学習の軸となる総合的な学習の時間では、平成 29 年の学習指導要領の改訂において、探究的な学習の過程を一層重視している。各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとすると共に、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成することを目指している。これは、そのまま「主体的・対話的で深い学び」につながっているとと言える。そこで、〈自己効力感〉を原動力とした探究的な学習の在り方をさらに研究し、子どもと共に「深い学び」を創り出したいと考えている。

課題を追究し解決していくという探究的な学習の過程で身に付ける「探究的な見方・考え方」は、教科等の学習の場面で生かされるだけでなく、今後の学習や国際社会の一員としての人生においても活用される、汎用的な力に結び付く。子どもが、身に付けた力を教科等の学習や生活の中で生かし、発揮しようとしたとき、学びが役に立つ実感を得ることができ、そこに「深い学び」が見いだされる。課題を見付け、解決のために追究していく探究的な学習の過程を楽しみ、学びを生かせることに喜びを感じる如果能够できれば、自己の生き方を広い世界で前向きに切り拓いていくことができるだろう。

このような考えから、くすのき学習【地球】プロジェクトにおける研究主題を、「探究を楽しみ、学びを自己の生き方に生かそうとする子どもの育成」とした。

### 2 くすのき学習【地球】プロジェクトにおける「子どもと創る『深い学び』」

#### (1) 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【地球】プロジェクトの授業づくり

まず、くすのき学習【地球】プロジェクトにおける「深い学び」について、探究的な学習の過程と、そこからつながる学習や生活の中で、「深い学び」に達した子どもの姿を次のように考えてみた。

#### 「深い学び」に達した子どもの姿

- 自ら設定した課題を追究する中で、協働することや解決できることに楽しさを感じている。
- 身に付けた資質・能力を、各教科等の学習と相互に生かしている。
- 探究の面白さを知り、学習や生活の中で探究心を持って活動している。
- 身に付けた資質・能力が汎用的なものであることに気付き、自分と世界とのつながりという広い視野を持って自己の生き方に生かそうとしている。

これらの姿から、くすのき学習【地球】プロジェクトにおける「深い学び」を、

探究的な学習で身に付けた力を、教科等の学習や生活の中で生かし、発揮することで、  
学びが自己の生き方に役立つことに気付くことができる学び

と捉えた。

子どもと、学習材・他者・自分自身をつなぐために、探究的な学習を効果的に取り入れた授業づくりを進めていく。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究的な学習の過程（探究のプロセス）を質的に高める工夫や、他者と協働して課題を解決しようとする学習指導の工夫、学ぶことの意味や価値を考えたり、学んだことを自己の生き方につなげようとしたりすることのできる振り返り等について、研究していく。

## (2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

### ア 学習材とつなぐ手立て

- ・子どもの興味・関心を喚起し、探究にふさわしい課題を設定することのできる学習材の開発と、そのための子どもの実態の把握
- ・自ら探究したいと思える課題意識を持つことのできる学習材との出会いの工夫
- ・探究的な見方・考え方を働かせながら学習材とかわることのできる場の工夫
- ・自分にとっての探究的な学習の意義を考えることのできる手立ての工夫

本プロジェクトにおける探究的な学習では、学びの場を世界や地球へと広げ、様々な社会問題から課題を設定して探究していく。探究的な学習では、自ら探究したいと思えるような課題意識をどのように持たせるか、そして、学習に向かう意欲をいかに継続させるかが大きなポイントとなる。ものやこと、人などを捉える感性や問題意識が揺さぶられて、探究的な学習への取組が主体的で真剣になるためには、子どもの「知りたい」「調べたい」という強い思いが必要である。子どもの興味・関心を喚起させるためには、発達段階や既習の知識・技能、生活の実態等に沿った学習材と出合わせなければならない。設定した課題が探究にふさわしいものであるか、自分事として探究の必要感を持つことができるかということが大切である。効果的な体験活動を開発したり、子どもの身近な生活から課題を見付け出す手立てを考えたりすることも重要である。学習材との出会いの場面で、子どもが驚きや疑問を感じたり、自分の意識とのずれや違和感に気付いたりするような手立てを図り、探究に向かう必要感を持たせなければならない。体験活動で実感したことから課題を見付けたり、地域の方やその道の専門家との出会いから自分にとって価値のある課題を設定したり、じっくりと思考する場を設けて日頃感じていた問題を改めて見つめ直したりして、子どもと学習材をつなぐことができるような出会いを工夫する。

設定した課題について探究していく場面では、探究的な見方・考え方を働かせながら取り組むことができるような場の設定も工夫したい。例えば、調べ学習等では言葉による見方・考え方、数学的な見方・考え方、理科の見方・考え方など、教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方を繰り返し活用できる場を設定する。また、教科等の視点だけでは捉えきれない事象を、様々な角度から俯瞰して捉える見方・考え方を働かせるための手立ても必要である。よりよく課題を解決し、学びを自己の生き方に生かそうとする資質・能力を育成するために、これらの探究的な見方・考え方を働かせるための方法を探りたい。探究的な学習が、自分自身にとってどのような意義を持つのかを考えることも大切にしたい。探究のプロセスを知ることによって課題解決への筋道をイメージし、「できそうだ」「やってみたい」という思いを持って主体的に取り組むことができるだろう。

探究的な学習の過程で自分にどのような力が備わるのか、自分がどう成長できるのかを子ども自身が考えることのできる手立てを講じていきたい。

## イ 他者をつなぐ手立て

- ・必要感のある話合いを生む問いや課題設定
- ・対話的な学びのための思考ツールの効果的な活用
- ・協働的な学習を創り出すための教師のコーディネート
- ・探究活動の過程での自己評価や相互評価

探究的な学習に協働的に取り組むためには、他者との対話が欠かせない。そして、その対話を深めるためには、まず、必要感のある話合いの場を設定することが大切である。子どもが、「友達と話したい」「いろいろな意見を聞いてみたい」と思えるような問いや課題を設定したい。また、子どもと他者をつなぐため、対話的な学びを生み出す思考ツールを活用したり、教師が話合いをコーディネートしたりする。収集した情報を整理・分析したり、自分の考えをまとめたりする場面や、共同学習者とのかかわりの中で、自分の思いや考えをうまく伝えたり、互いの考えを出し合ってよりよいものを生み出したりする場面では、適切な思考ツールを選択し、有効に活用する。

探究活動の過程において、自己評価や他者評価を効果的に取り入れる。自己評価カードを活用してこまめに学習を振り返ることで、単元を通して探究に対する意欲を継続し、学習材とのつながりを持続させる。小さな課題解決の場面でも自己を振り返り、一つ課題を解決できたことを実感することで、成功体験を獲得させたい。探究的な学習において、課題の追究が進んでいることに手応えを感じることで、探究の楽しさを味わわせたい。

また、共同学習者との相互評価やゲストティーチャー等からの他者評価により、他者に共感したり協働的な学びを実感したりすることができ、それらは子どもと他者をつなぐ一つの手立てとなる。

## ウ 自分自身をつなぐ手立て

- ・「過去・現在・未来」の自分自身をつなぐ手立ての工夫
- ・自己の学びや変容、成長を実感することのできる振り返りカードの工夫
- ・身に付けた資質・能力が発揮される場の設定
- ・学びの成果を具体的に感じられる手立ての工夫

学習を振り返り、自分の学びがどうであったかをじっくりと見詰め、自己の学びや変容、成長を実感することができるような振り返りカードを活用する。例えば、学習材との出会いの場面では、どうすれば学習課題を解決できるのか、そのために自分は何をすればよいか、これまでの学習や生活経験の何が生かせるかといった見通しを持たせることで、「過去の自分自身」とつながり手立てとなる。探究活動の場面では、他者の考えに触れ、課題に対する自分の考えを練り直したり捉え直したりすることで、「現在の自分自身」の変容や成長に気付かせる。振り返りの場面では、学びを自己の生き方にどう生かしていくか考えさせることにより、「未来の自分自身」を見詰めさせる。このような振り返りの視点を与えたり、振り返りカードを工夫したりすることで、自己の学びや変容をより深く認知することができる。また、書く時間を十分に保障し、記述に他者を意識した内容や未知のことを知る喜び、探究の面白さへの気付き等が表れるような振り返りカードの在り方を探る。

学びの中で、子どもと自分自身をつなぐためには、自分が課題を解決できたことや他者のために役立ったことを目に見える形で実感できるようにすることが大切である。共に学習を進める共同学習者からの評価や、ゲストティーチャー等の探究活動を通してかかわった人からの評価を子どもに返すことで、充実感や達成感、他者に感謝されることによるやりがいや喜びを味わわせたい。また、他者からの評価を材料とした多面的な評価も行い、資質・能力が身に付き、発揮されている姿を見取る。

身に付けた資質・能力が発揮される場を、教科等の学習やくすのき学習での新たな課題解決の場面に設けるようにする。中学年から高学年へという時間軸のつながりも意識しながら、教

科等横断的な単元を構想し、子どもと学びがつながる場を設定する。

単元の終末では、探究的な学習を通してできるようになったことを考えさせる。身に付けたい資質・能力については、学習を進めながら教師からの働き掛けと子どもとの話し合いによって決定し、子どもに意識させておく。この学習を通してどのような力が育ったのかを子ども自身が把握することで、成長を実感させたい。更に、それらの資質・能力は汎用的なものであり、これからの自分の生き方で生かされる力であるということにも気付かせたい。

### (3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

#### ア 評価の視点

##### (7) 指導者評価

各単元で育てたい資質・能力と、目指す子どもの姿を、「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの観点で単元開始前や授業前に具体的に設定し、「深い学び」が表出した姿を見取る。授業前後や単元前後など時間の変化の中で子どもの変容を見取るとともに、学習の様子や成果物、記述等の幅広い空間で評価していく。

「知識・技能」については、探究的な学習の過程において獲得される知識や技能と、それらが概念的な知識へと高まったものが、どの場面でどのように獲得されるのかを整理し、見取っていく。

「思考力、判断力、表現力等」とは、探究的な学習の過程における各プロセスで獲得される力のことであり、また、各教科等の学習や生活において活用されるものでもあるため、教科等横断的な単元の中で評価していく。

「学びに向かう力・人間性等」については、単元や各教科等、学年といったものを越えて育まれるものであることから、時間軸でつないだ長期的な視点で見取っていく。

##### (4) 自己評価

子どもが、探究的な学習を振り返り、自分自身の成長を実感し学びを自覚できるようにする。自己評価によって自分自身とつながり、これからの自己の生き方に学びを生かそうとする姿勢の育ちにもつながっていくと考える。

##### (ウ) 相互評価・他者評価

子どもに協働的な学習のよさや自分の学びに気付かせるために、相互評価や他者評価を取り入れる。他者評価では子どもを多面的に捉えることができ、指導者評価と併せて評価を充実させることにもつながる。

#### イ 評価の具体的な手立て

- ・評価のための観察記録の蓄積
- ・学びを見詰め、振り返ることで、自分自身とつながる自己評価
- ・相互評価、他者評価の効果的な活用

くすのき学習において、資質・能力が身に付いているかという見取りは、直接の指導者である教師の観察によるところが大きい。目の前の子どもの様態を観察し、表情や発言、活動の内容から「深い学び」が創り出されているかを見取っていく。視点を明確にして、子どもの表情や発言をじっくりと観察すると共に、探究的な学習からつながる教科等の学習や生活の中で見取っていかなくてはならない。そのために、観察記録を蓄積して、時間軸でつながる長期的な変容を見取る。子どもの姿や作品、板書などを画像や映像として残し、事後の評価の材料として蓄積していく。また、子どもの内面が表出されるようなワークシートや振り返りカードと、それらを積み重ねたポートフォリオなどの評価材料を活用する。

共同学習者同士による相互評価や、ゲストティーチャー、家庭からの他者評価は、子どもの姿を空間軸でつなぎ、多面的に捉える評価の材料として有効である。また、これらの評価の方法は、子どもと他者をつなぐ手立ての一つとしても効果的である。様々な手立てを講じ、検証していきたい。

(吉岡 舞)